

エイモス 『スタンダードにおける時間と物語』

高木, 信宏
九州大学文学部助手

<https://doi.org/10.15017/9949>

出版情報 : Stella. 12, pp.125-128, 1993-03-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :



エイモス『スタンダールにおける時間と物語』

高木信宏

文学作品、とりわけ小説における「時間」を問題にするばあい、物語内容の時間と物語言説の時間の諸関係についての考察を精密化した、ジェラルド・ジュネットに代表される物語論にたいしてまったくの無関心を装うことはゆるされまい。本書『スタンダールにおける時間と物語』(Benjamin McRae Amoss, Jr., *Time and Narrative in Stendhal*. Georgia: the University of Georgia Press, 1992, 217 pp.)も物語論の成果にたいして敏感ではあるが、著者——エイモスは現在ヴァージニア州ロングウッド単科大学でフランス語の助教授として教鞭についており、本書は1990年にヴァージニア大学に提出された博士論文(同論文は1990年度のSouth Atlantic Modern Language Association Awardを受賞している)を公刊したものである——の関心は、むしろ厳密にいった物語の言説ではなく物語の内容を考察の対象とするものであろう。作品が、作者の時間意識の表象に還元されて捉えられるのでもなければ、物語内容の編年史的な時間と物語言説の属する時間との屈曲した相関関係を介してその構造が把握されることもなく、本書のなかで試みられているのは、作家が時間経験を物語る行為によって形象化することにより、物語がどのような意味を帯びるのかを解きあかすという点で、テーマ論的な時間分析と呼びうるものである。このような観点の背景としては、書名にもうかがえるように、エイモスがポール・リクールの『時間と物語』の解釈学に理論的におおく示唆をうけている点が見おとされてはならず、したがって、本書の理解のためにはリクールへの参照が不可欠となる。とはいえ、理論的な側面ばかりが強調されてはならないだろう。スタンダールの多岐にわたる作品がとりあげられるのも、すぐれた歴史意識をもち、さまざまなかたちの物語行為の実践にたずさわった作家であるからにはほかならない。換言するならば、エイモスにとってスタンダールは、たんなる理論的な応用の対象ではなく、時間と物語についてのリクールの基本的な命題に豊かに応答する作家として考えられているのだ。そ

の意味でも、本書は意欲的な試みであるといわねばならない。

第1章「The Introduction of Narrative」では、『ラシーヌとシェークスピア』と『恋愛論』がとりあげられ、スタンダールが自身の歴史的な位置づけや恋愛経験にふれるときにかいまみせる時間（歴史）意識に考察の焦点が当てられている。前者において、ロマン主義にたいする考えが肯定的に述べられているが、じつは、作家がロマン派の成功の秘訣としてあげる同時代の状況への適応という行為ほど、劇作家や小説家として生涯不成功におわり、また、後世の読者を信じ同時代人のあいだで疎外感をもちつづけた作家自身の境遇に矛盾するものはない、とエイモスは指摘する。また、この小説擁護のパンフレットにおいて、スタンダールの小説家への変貌は物語的な技法がすでに紛れこんでいる点に予告されているとし、さらに、物語が重きをなす類似の傾向は、イデオロギーの書としての体裁をもつ『恋愛論』においても確認できうるのではないかとして論をすすめる。理論的構築よりむしろ架空の新聞からの抜粋や恋の逸話などのさまざまな物語の堆積によってこそ本書の権威は保証されているのだと述べている。

第2章「Narrative and the Voyage」のなかでは、スタンダールの旅行記のなかでもグループ旅行の一行の見聞録という体裁をもつ『ローマ漫歩』が考察の対象となっている。まず、同時代人と価値観を共有しない語り手像の想定にはじまり、その確固たる視点からローマの都市の変貌——古代ローマ都市とルネッサンス期のその再建——と、その変化を超えた普遍的側面が語られるという操作によって、都市の歴史的な遠近法がかたちづくられている点が検討されている。また、都市のアイデンティティーを語るうえで、スタンダールがもちだす古代の遺跡の略奪・流用やその考古学的探究にかんする独創的な視点にもエイモスは着目し、そこでの説話的な組み立ては、ローマの歴史的な物語を人間の生涯の象徴、あるいは類似物に変えうるものであると説明し、自伝的著作『アンリ・ブリュールの生涯』において作者がみずからの自己同一性を検証する方法が先どりされていると捉えている。

第3章の「Narrative and the Self」では、日記と自伝的作品がとりあげられ、スタンダールの時間との格闘が考察されている。『日記』において、日々の生活を概括する行為は、作家に自己認識の方法としてのエクリチュールをすぐれて見いださせるものであったが、その特徴はなによりも純粹な記録としての性格を危うくするポリフォニックな声の増殖、すなわち、主人公、記録者、再読者といった複数の声の存在であり、絶えまない自己認識の運動はこれら相互

の競合関係に深くかかわっている、とエイモスは指摘する。『アンリ・ブリュラルの生涯』において自己へとむかうエクリチュールは、史実的な過去の復元と作家自身のアイデンティティの刻銘という2重の文学的要請のもとにより壮大な企てとしてあらわれる。しかも同時に、スタンダールは、自分のみならず後世の読者たち——彼の理想の読者である「幸福な少数者」——にとっても、自身の人生がいわば「記念碑的」な価値と機能をはたすことを意図しているのだ、とエイモスは解説し、この作品における過去から未来へむかう時間の遠近法を浮きあがらせる。

しかしながら、周知のように『アンリ・ブリュラルの生涯』の執筆は、フランス軍のミラノ占領時代の回想にいたるや頓挫する。「題材が語る者の力を超えているのだ」という語り手のことばに示唆されるように、スタンダールは編年史的な性格の濃い自伝のエクリチュールの限界を感じ、若き日のミラノ体験を『パルムの僧院』の冒頭に織りこむ。換言するならば、体験の矮小化を孕む過去の史的再現よりも、虚構の創作に追憶のよりふさわしい形式を見いだしたことになるが、おそらくスタンダールの判断は、『時間と物語』における「時間は物語の形で文節されるのに応じて、人間的な時間となり、物語は時間的実存の条件となるときに、その完全な意味に到達する」というリクールの基本テーゼと交叉するものであろう。だが、この問題についてのエイモス自身による掘り下げはなく、つづく2つの章で『パルムの僧院』の語りと時間に考察の対象がしぼられるときに提出される問いは、彼が時間をめぐるスタンダール固有のアポリアとみなす、作家と同時代や後世の読者との関係にむけられることになる。まず、第4章「*Chartreuse: The Act of Narration*」のなかでは、作者がみずから同時代の社会に位置づけるためにくだんの小説中で展開する「物語る行為」の解明に考察があてられている。エイモスによると、とりわけ注目しなければならないのは、作家が暗に配置している虚構の語り手と虚構の読者による対話にほかならず、そこで述べられる意見や判断が一定の歴史的・社会的な状況を反映することによって同時代の読者に対話者たちの像を想定可能にしているのだ、ということになる。しかし、同時代の人びとにたいするスタンダール固有の両義的な態度のために、「物語る行為」はより複雑な側面をも含んでいる。その一例としてエイモスは不定代名詞「on」の用法を挙げて、どちらかといえば主人公たちに辛辣な虚構の読者のほかに、さらにいっそうめだたないかたちで語り手が呼びかけるべつの読者——「1880年の読者」であり、「幸福な少数者」である「暗黙の読者」——を識別できるのではないかと

述べて、このばあいの語り手はテキスト全体を俯瞰する視点をもった「暗黙の作者」であるとみなしている。

第5章の《*Chartreuse: The World of the Text*》においては、作中人物の経験における過去・現在・未来の相互作用を探究しながら、物語じたいがどのようにして未来の読者にたいする象徴的な呼びかけをかたちづくっているのが問題となる。過去にかかわる諸テーマ（考古学、家系、古文書、神話、伝説）と未来のテーマである占星術の考察において、それらが主人公たちの自己同一性や行動原理に緊密にむすびつき、彼らの現在の経験とともに時間の遠近法を織りなしている点が指摘される。また、現在は、時計の音や作中人物の容貌の変化といった時間の経過を想起させる表象と、それにたいする作中人物の意識や知覚の齟齬によっても彩られていよう。だが、現実の読者とのかかわりにおいて見逃せないのは、主人公の後継者との関係によって特徴づけられる未来にはほかならない。世代連続のモチーフをもってかたちづくられた時間の展望において、ファブリスの未来は身近な人びとや愛児サンドリーノの死のために一種の空白としてあらわれるが、この空白に主人公の後継者として位置するものこそテキスト外の読者——ファブリスの物語を読みおえて自身の世界観に影響をうける読者——なのだ、とエイモスは主張する。

締めくくりとして、リクールの唱える物語の限界、すなわち、虚構作品が永遠のしるしに値するような「限界経験」を描きだそうとするばあいの言語の表象不可能性が問題になる。スタンダールの主人公たちの幸福な時間を比較・検討するなかで、エイモスは、語り手によって永遠につうじる時間経験が切断されるという逆説的な操作によって、かえって幸福な時間は主人公、さらにはスタンダールじしんにとって有意味なものになるのだと結論づけている。

エイモスが、ジュネットの物語論の述語を説明づけもなく援用したりする点で、ポール・リクールの最新の解釈学的考察をどこまで厳密に消化しているのかに若干の疑念を感じざるをえないが、いずれにせよ、本書がジョルジュ・プーレ、ハンス・ボル＝ヨハンセン、ミシェル・クルゼなどによってなされてきたスタンダール世界における「時間」の研究の流れに、あらたな視点の可能性をもたらしたことだけは確かだろう。